

発達障害に対する高校生の知識と意識に関する調査研究

○村上理絵 吉利宗久
 (岡山大学大学院教育学研究科)
 KEY WORDS: 発達障害、知識、意識

I. 問題と目的

青年期における発達障害のある生徒は、自分のことを客観視できるようになり、他人との関係から違和感、疎外感を感じつつも、コミュニケーションの苦手さから対応策が見いだせず、孤立したり自己評価が低くなりがちであるとされている。一方、先行研究(石崎, 2017; 小林, 2015)では、本人が自己理解を深めるだけでなく、周囲が発達障害について適切に理解し、特性に配慮した対応を行うことにより、発達障害のある生徒が学校や社会へ適応しやすくなるのが指摘されているが、一般社会における発達障害に対する理解は必ずしも十分ではない。高校におけるインクルーシブ教育を推進するうえで、クラスメートの理解に基づく友人関係の構築は不可欠な条件であると考えられるが、発達障害のある生徒が対人関係で抱える困難は大きく、その後の様々な不適応につながることも危惧される。そこで本研究では、友人関係に発達のな変化がみられ、クラス集団における活動が中心となる強い凝集性を備えている高校生に焦点を当て、発達障害に対するイメージと意識に関する特徴と傾向について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

対象は、西日本の大都市圏に設置された公立高校(全日制普通科)の全在校生 991 人とし、質問紙は以下の 3 つのパートから構成した。なお、発達障害について全く知らない生徒への配慮が必要と判断し、発達障害に関する解説を質問紙の冒頭に付記した。

(1) フェイスシート

学年、性別、障害者との接触経験(ある/ない)、発達障害の認知度(全く知らなかった/言葉は聞いたことがあった/知っていた)及びイメージ(親切/活発/暗い/迷惑/優しい/怖い/素直/危険/冷たい/真面目から 3 つを選択)について尋ねた。

(2) 発達障害に関する基本的知識

発達障害に関する解説書から、○×形式による 2 択方式問題を 6 項目設定した。

(3) 発達障害に対する意識

大学生を対象に発達障害に対するイメージを調査した菊池(2011)を参考に、その因子分析の結果から得られた 5 因子(実践的交流 5 項目、能力肯定 3 項目、社会的交流 2 項目、理念的好意 3 項目、教育可能性 2 項目)から因子負荷量 0.5 以上の項目を改めて抽出し、15 項目を作成した。回答は、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそう思う」、「そう思う」の 5 件法とした。

III. 結果

調査票は、全学年 991 名に配布し、そのうち、当日の欠席等による無回答を除く 956 人から回答を得た(回収率 96.47%)。

発達障害に関する基本的知識は、正答の場合を 1 点、誤答の場合を 0 点として採点したところ、平均点は 4.02 点($SD=1.21$)、6 点満点中 4 点を取った人が 30.75% (294

人)と最も多かった(図 1)。

発達障害に対する意識は、それぞれの因子ごとに平均点および標準偏差を算出したところ、理念的好意や教育可能性が平均 3.5 点以上であり、実践的交流、能力肯定、社会的交流に比べて高かった(図 2)。

基本的知識と意識の関連を見ると、理念的好意($\chi^2=47.543$, $df=24$, $p<.05$)との間に関連が見られ、残差分析の結果、基本的知識の合計得点が高い人の方が、理念的好意を高く評価する傾向があることが示された。

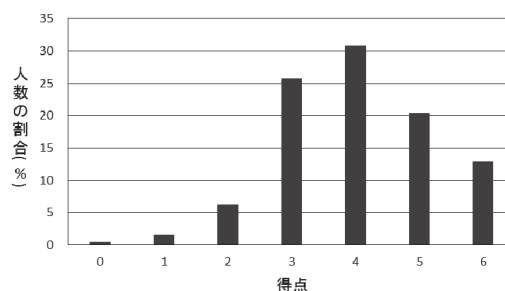


図1 発達障害に関する基本的知識における合計得点の人数分布(%)

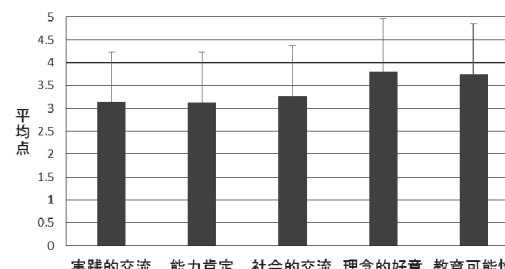


図2 発達障害に対する意識に関する因子の平均点および標準偏差

IV. 考察

本研究の結果から、高校生らは発達障害について十分な知識を備えているとは言い難い現状があることが明らかになった。意識について、一般的、社会的に認知されているような内容については一定の評価が見られるものの、発達障害のある生徒の能力の認識や直接的な関わりにはやや消極的な姿勢が示された。早期からの適切な情報提供に基づく理解の促進を課題として指摘できる。ただし、基本的知識は理念的好意としか関連が認められなかったことから、学校や生活場面における本質的な理解を深化するための条件について、いっそうの検討が必要となる。

(文献)

石崎優子(2017) 子どもの心身症・不登校・集団不適応と背景にある発達障害特性. 心身医学, 57, 39-43.

小林真(2015) 発達障害のある青年への支援に関する諸問題. 教育心理学年報, 54, 102-111.

菊池哲平(2011) 教育学部学生における発達障害のイメージ-接触経験・知識との関連. 熊本大学教育実践研究, 28, 57-63.

(MURAKAMI Rie, YOSHITOSHI Munehisa)